

# 住居観に関する研究

## その5、住居観と生活諸条件の関連

中 島 喜代子

### Studies on the View of Dwelling House and Home Life

#### Part 5, *The Relation between the View of Dwelling House and Home Life, and Factors of Family Life*

Kiyoko NAKAJIMA

## 1. 緒 論

前報では、住居観の規定要因の1つである居住歴と住居観との関連を検討し、居住歴が住居観を規定することを実証した。本報では、住居観を規定するその他の要因として、家族の社会的階層条件、家族構成、居住者がもつ人生観や生活観等を取りあげ、住居観パターンとの関連を検討する。

ところで、住居観は図1に示すように、直接的には住に関する体験的経験と知識的・認知的経験とによって形成されてきたものと考えられる。この体験は、一般的には居住歴として表現されるものである。また、居住歴における住に関する突発的な重要な変化は短期的に住居観に変化をきたす要因になる(これを住エポックとよぶ)。別に、知識的・認知的経験としては、住学習(住教育)、住民運動参加等があげられる。

住居観に影響を与えているものをさらにさかのぼって探してみると、社会階層、生活経歴、個性等が人生観、生活観を形成し、それらの要素が互いに影響しあいながら住居観が形成されていくと考えることができる。個人の住居観が家族全体にわたるものが(この間には力関係が働く)家族の生活型に影響を与える。家族生活には、家族構成型、職業の性格に主に起因する家族の生活時間型、家族の人間関係型あるいは対地域の人間関係の要素等が考えられる。以上の家族の各生活型に対応し、また住居観の影響

を受け、間取りのプリンスプルとデザイン志向をふまえ、諸々の社会的(住宅関係施設等)条件、経済的条件、自然環境的条件に影響されて平面構成型、立面構成型が決定され、最終的にある特定の家族に適した住宅が生まれることになる。そこではまた、住宅とその中でおこなわれる実際の住生活に対応して、住評価・住要求・住計画が生じ、それが新しい居住歴となって住居観にフィードバックされ住居観を変化させていくと考える。

以上のような住居観関連構造が考えられるが、本報では、前報に引き続き、この構造図の中で、前述した生活諸条件と住居観との関連について妻と夫別に検討し、その関連性の有無と各住居観パターンがもつ特徴および妻と夫での現われ方の差異についても検討を加える。

## 2. 調査の方法

調査は、前報その3、その4と同一のものであり、調査対象は農業地、市街地(住宅地、商業地、工業地の各用途地域)に居住する小・中学生をもつ妻と夫各956件である。前報その3で統計的に抽出した4種類の住居観パターン、すなわち「合理型類型」「誇示型類型」「自律型類型」「慣習型類型」を用いて分析をおこなう。

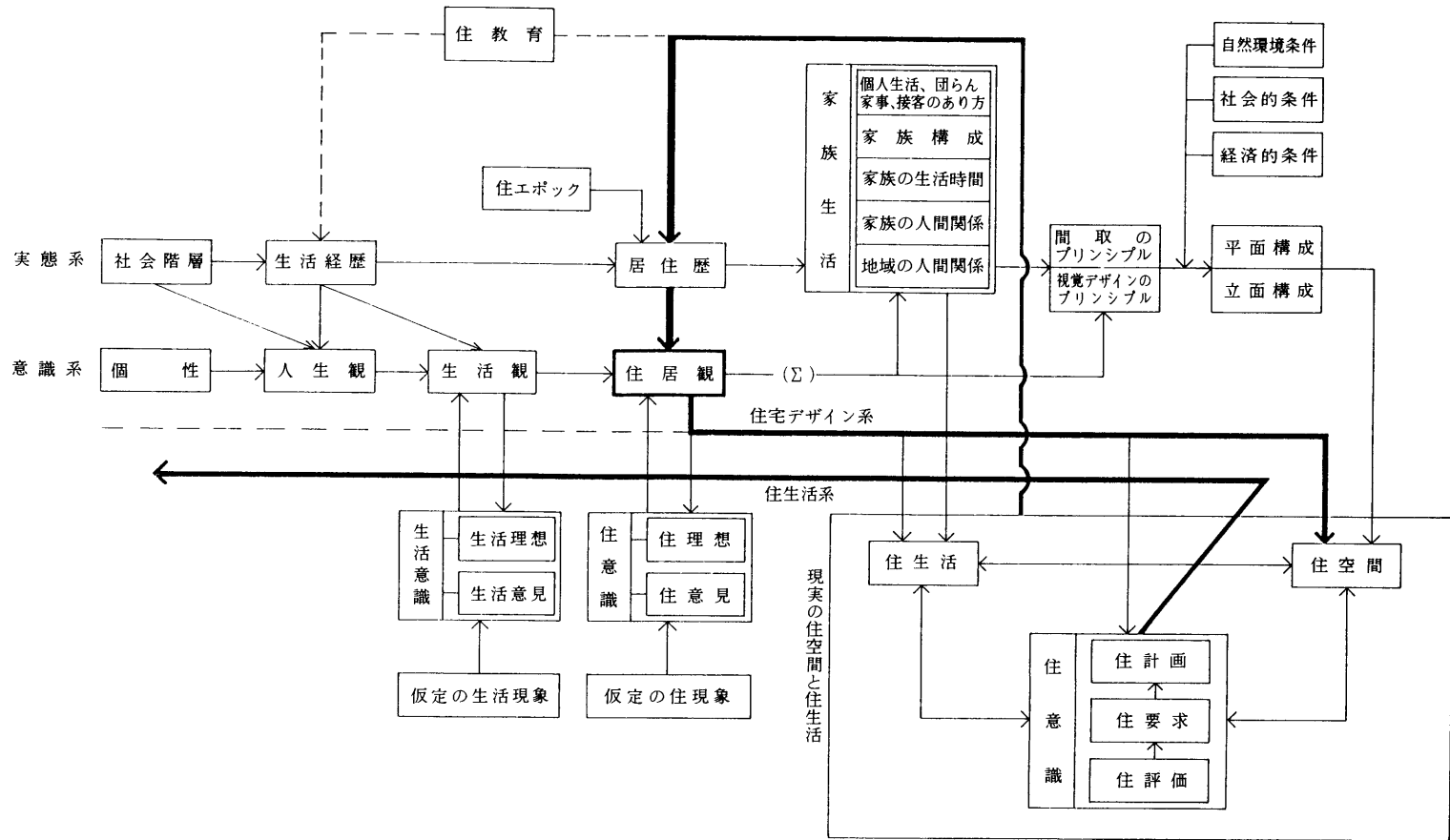


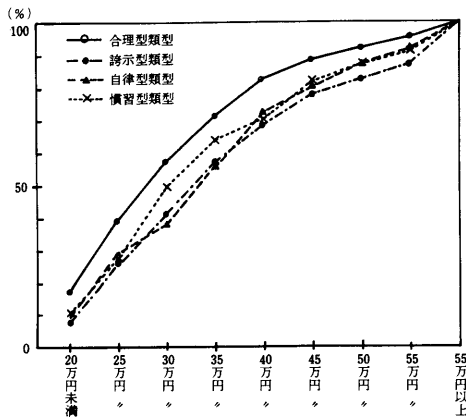
図1 住居観関連構造図

### 3. 調査結果と考察

#### 1) 住居観パターンと社会階層的条件の関連

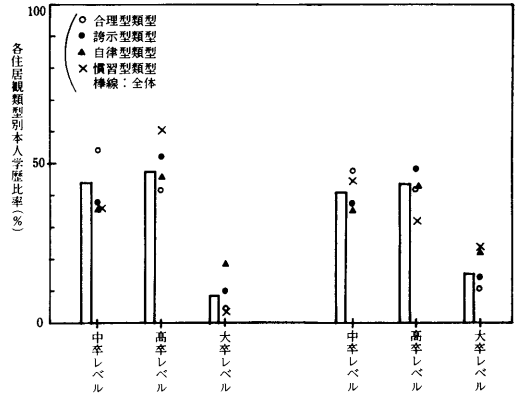
住居観パターンを規定する要因の1つに、居住者の社会階層的条件が考えられる。従来、住意識と階層的条件の関連性については研究が行なわれており、その関連性が指摘されている<sup>1)</sup>。しかし、近年中間階層への帰属意識が9割を越えることが広範に認識され、階層の平準化が唱えられている。このことから、住居観(住意識)についても階層的特徴はみられないという報告も行なわれている<sup>2)</sup>。しかし、一方では住生活の実態は必ずしも平準化されているとはいえず、住宅格差の広がる傾向もみられる。こうした情況の中で、現在住居観と階層的条件とが、どのような関連構造を有しているかを把握しようとするものである。

本研究の調査対象は、各用途地域にまたがり、しかも異種住宅階層が混在しており、その意味で社会全体に一般化してとらえられると考える。社会階層的条件として、世帯収入、本人と配偶者の学歴、夫の職業をとりあげる。



(妻) <1>

< >内の数字は $\chi^2$ 検定の有意差(%)



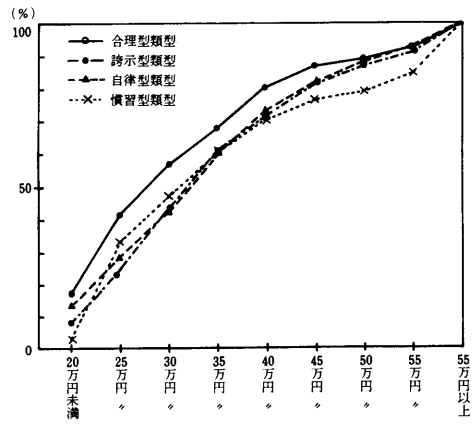
(妻) <1>

(夫) <1>

< >内の数字は $\chi^2$ 検定の有意差(%)

図3 妻・夫別住居観類型と本人の学歴の関連

「合理型類型」において中卒レベルが多くなっており学歴は他パターンより低い<sup>3)</sup>。逆に、「自律型類型」では中卒レベルが少なく大卒レベルの方が多くなっており学歴は他パターンより高い(妻・夫ともに $\chi^2$ 検定



(夫) <1>

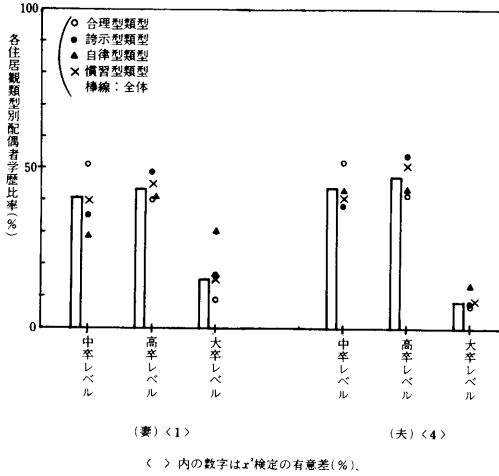
図2 妻・夫別、住居観類型別世帯月収の累積比率

まず、住居観パターンと世帯収入との関連をみると、図2に示すように、妻・夫ともに「合理型類型」では低い層が多い(妻・夫とも $\chi^2$ 検定1%水準で有意差あり)。

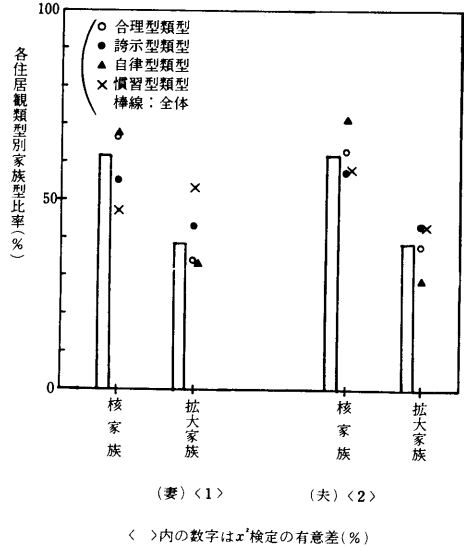
同様に、居住者本人の学歴と住居観パターンの関連をみると、図3に示すように、妻・夫ともに「合

理型類型」において中卒レベルが多くなっており学歴は他パターンより低い(妻・夫ともに $\chi^2$ 検定1%水準で有意差あり)。また、妻と夫を比較すると妻の方がよりその傾向が顕著にみられる。配偶者の学歴においても、妻・夫ともに「合理型類型」で学歴は相対的に低く、「自律型類型」では高くなっており( $\chi^2$ 検定は妻で1%、夫では5%水準で有意差あり)、この場合も妻においてその傾向がより顕著であ

る (図4)。



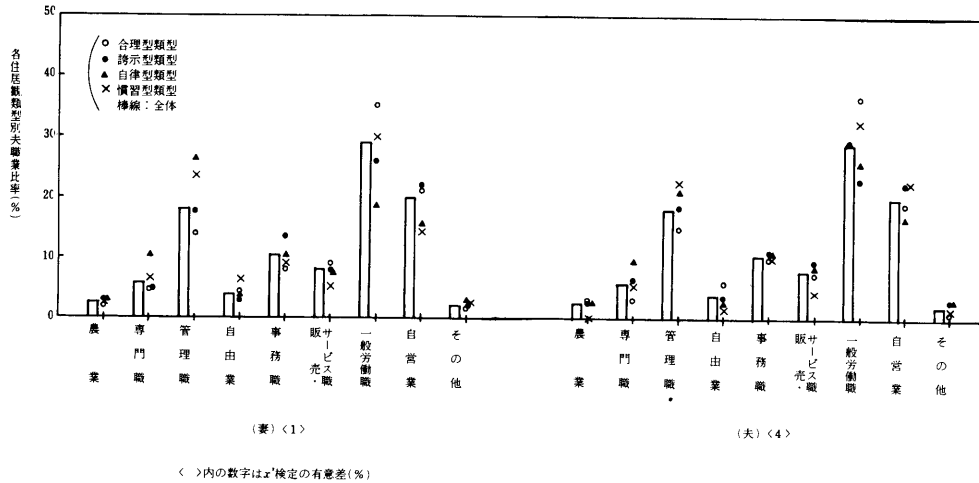
(妻) <1> (夫) <4>  
< > 内の数字は $\chi^2$ 検定の有意差(%)



(妻) <1> (夫) <2>  
< > 内の数字は $\chi^2$ 検定の有意差(%)

図4 妻・夫別住居観類型と配偶者の学歴の関連

図6 妻・夫別住居観類型と家族型の関連



(妻) <1> (夫) <4>  
< > 内の数字は $\chi^2$ 検定の有意差(%)

図5 妻・夫別住居観類型と夫の職業の関連

次に、夫の職業と住居観パターンの関連をみると、図5に示すように、妻では「合理型類型」で一般労働職（主に肉体を使う職業）が多く、一方「自律型類型」では一般労働職、自営業が少なく、管理職、専門職が多い（ $\chi^2$ 検定1%水準で有意差あり）。夫でも同様の傾向がみられるが（ $\chi^2$ 検定5%水準で有意差あり）、妻の方がより顕著である。

2) 住居観パターンと家族構成の関連

調査対象がすべて小・中学生をもつ家庭であるた

め、妻・夫の年齢や家族周期は、ほぼ均一化している。そこで、本節では住居観パターンに影響を与えると考えられる家族型と、それに関連をもつ家族人数について、住居観パターンとの関連を検討する。

まず、家族型と住居観パターンとの関連をみると、図6に示すように、妻・夫ともに「自律型類型」で核家族の割合が他パターンより多く、「慣習型類型」「誇示型類型」では、拡大家族の割合が多い（ $\chi^2$ 検定は妻で1%、夫では5%水準で有意差あり）が、「慣習型類型」のこの傾向は、妻の方により顕著に

現われている。また、妻では「合理型類型」でも核家族の割合が多い。

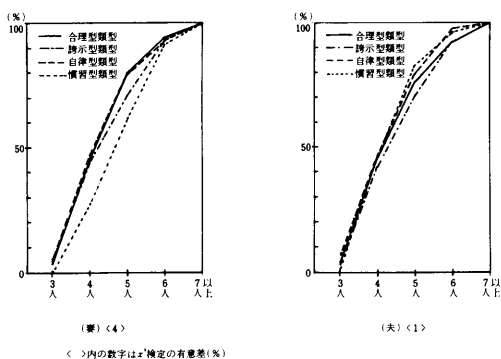


図7 妻・夫別住居観類型別家族人数の累積比率

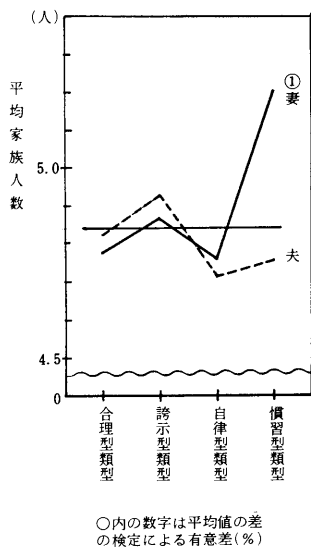


図8 妻・夫別住居観類型と平均家族人数の関連

次に、家族人数と住居観パターンとの関連を図7に示し、住居観パターン別の平均人数を図8に示す。妻では、「慣習型類型」で家族人数が多く、「自律型類型」「合理型類型」ではやや少ない傾向がみられる( $\chi^2$ 検定5%水準で有意差あり、平均値の差の検定1%水準で有意差あり)。これは、前述の家族型でとらえた関連を裏付けるものといえる。しかし、夫では住居観パターンによる明確な差異は認められない。

### 3) 住居観パターンと生活観等との関連

住居観に影響を与える一つの側面に、人生観、生

活観、個性等が考えられる。本報ではこの側面の影響要因として、生きがい、生活観、老後観、女性観と本人の趣味・興味などをとりあげ、住居観との関連を検討する。

まず、人生観の一側面をとらえる「生きがい」と住居観パターンとの関連を、図9に示す。

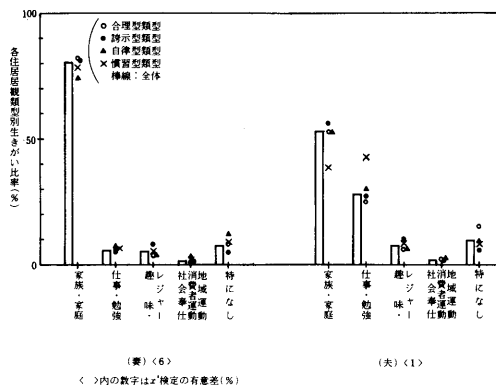


図9 妻・夫別住居観類型と生きがいの関連

妻と夫の「生きがい」を比較すると、妻では「生きがい」の大部分が家族・家庭で占められており、夫でもこれが半数を越えるが、仕事・勉強に対しても3割近い値を示す違いがみられる。妻では、住居観パターンによる大きな差異はないが、「誇示型類型」でやや趣味・レジャーの割合が多く、「自律型類型」で家族・家庭に対する割合が他パターンよりやや少ない傾向がみられる。一方、夫では「慣習型類型」で仕事・勉強に生きがいをもつ割合が多く、家庭・家族に対する割合が他のパターンより多い( $\chi^2$ 検定は妻で10%、夫では1%水準で有意差あり)。

次に、生活観と住居観類型との関連を図10に示す。これは、門脇厚司による「生きかた」の型の調査項目を用いたものであり、「社会への構え」として「変革」<保持><逃避>(それぞれ図中の調査項目のアとイ、ウとエ、オとカが該当する)の3軸、「構えの力点」として「私」重視と「公」重視(それぞれアとウとオ、イとエとカが該当する)の2軸の組み合わせより同図に示す6種類の型が設定されている。夫と妻を比較すると、妻では「生活享受型」が一番多く、一方夫では「社会変革型」が一番多くなっているが、他に「自己実現型」「現状保持型」も妻より多い値を示している。

住居観パターン別にみると、妻の場合「自律型類型」で「社会変革型」が多く、「慣習型類型」では「現

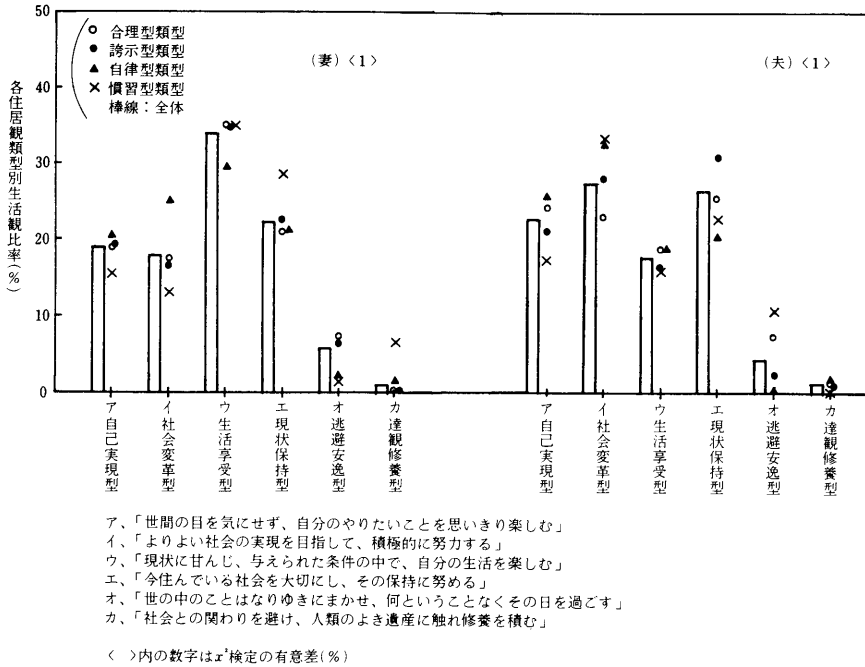


図10 妻・夫別住居観類型と生活観の関連

表1 妻・夫別住居観類型と「社会への構え」「構えの力点」の関連

性別	住居観 パターン	社会への構え				
		全 体 件 (%)	合理型 類型 件 (%)	誇示型 類型 件 (%)	自律型 類型 件 (%)	慣習型 類型 件 (%)
〈妻〉	変 革	338 (37.0)	135 (36.5)	119 (36.0)	62 (45.6)	22 (28.6)
	保 持	515 (56.3)	207 (55.9)	190 (57.4)	69 (50.7)	49 (63.6)
	逃 避	61 (6.7)	28 (7.6)	22 (6.6)	5 (3.7)	6 (7.8)
	全 体	914(100.0)	370(100.0)	331(100.0)	136(100.0)	77(100.0)
〈夫〉	変 革	465 (50.3)	148 (47.1)	177 (49.0)	102 (58.3)	38 (50.7)
	保 持	409 (44.2)	139 (44.3)	172 (47.6)	69 (39.4)	29 (38.7)
	逃 避	51 (5.5)	27 (8.6)	12 (3.3)	4 (2.3)	8 (10.7)
	全 体	925(100.0)	314(100.0)	361(100.0)	175(100.0)	75(100.0)

性別	住居観 パターン	構えの力点				
		全 体 件 (%)	合理型 類型 件 (%)	誇示型 類型 件 (%)	自律型 類型 件 (%)	慣習型 類型 件 (%)
〈妻〉	「私」重視	537 (58.8)	226 (61.1)	200 (60.4)	71 (52.2)	40 (51.9)
	「公」重視	377 (41.2)	144 (38.9)	131 (39.6)	65 (47.8)	37 (48.1)
	全 体	914(100.0)	370(100.0)	331(100.0)	136(100.0)	77(100.0)
〈夫〉	「私」重視	414 (44.7)	158 (50.3)	144 (39.9)	79 (45.1)	33 (44.0)
	「公」重視	511 (55.3)	156 (49.7)	217 (60.1)	96 (54.9)	42 (56.0)
	全 体	925(100.0)	314(100.0)	361(100.0)	175(100.0)	75(100.0)

状保持型」と「達観修養型」が多い。夫の場合、「自律型類型」は妻の同パターンの場合と同様に「社会変革型」が多いが、「慣習型類型」では妻と異なり「社会変革型」と「逃避安逸型」が多い。また「誇示型類型」では「現状保持型」の割合が多い( $\chi^2$ 検定は妻・夫とも1%水準で有意差あり)。

これを、それぞれ「社会への構え」と「構えの力点」別にトータルして、住居観パターンとの関連を表1に示す。妻と夫別にみると、妻では〈保持〉志向および「私」重視志向が多く、夫では〈変革〉志向および「公」重視志向が多い。住居観類型別にみると、妻の場合「自律型類型」で〈変革〉志向および「公」重視志向が他パターンより多く、「慣習型類型」では〈保持〉志向および「公」重視志向が多い。夫においては、「合理型類型」で「私」重視志向が多く、「自律型類型」では妻と同様に〈変革〉志向が多い。また「慣習型類型」では〈逃避〉志向が他パターンより多くなっており、妻の同パターンと異なった傾向を示している。

生活観の一側面として、子供との同居を望むか別居を望むかの老後観の一局面と住居観パターンとの関連を図11に示す。老後の同居・別居志向に対する妻と夫の差異をみると、両者ともに「別居」志向が

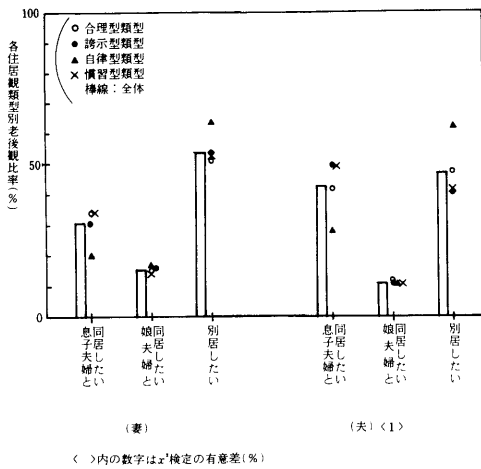


図11 妻・夫別住居観類型と老後観の関連

一番強いが、夫は「息子夫婦と同居」志向が妻より強く、妻では「別居」志向、「娘夫婦と同居」志向が夫より強い。住居観パターン別にみると、妻では $\chi^2$ 検定10%水準までの有意差はないが、「自律型類型」で「別居」志向が他パターンより強い。夫の場合、「自律型類型」では妻と同様に「別居」志向が強く、「誇示型類型」と「慣習型類型」では「息子と同居」志向が強い ( $\chi^2$ 検定1%水準で有意差あり)。

さらに、生活観の側面として、女性は仕事を重視すべきか家庭を重視すべきかという視点による女

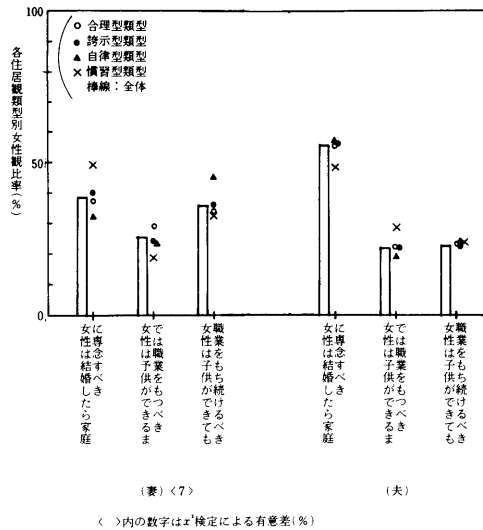


図12 妻・夫別住居観類型と女性観の関連

性観の一面と住居観パターンとの関連を図12に示す。妻と夫の差異をみると、夫の方に家庭優先派が多い。住居観パターン別にみると、妻の場合「慣習型類型」で家庭優先派が多く、「自律型類型」では仕事優先派が多い ( $\chi^2$ 検定10%水準で有意差あり)。一方、夫では大きな差異はみられず、生活観において「変革」志向を示した「自律型類型」においても、この女性観についてはその傾向を示していない。

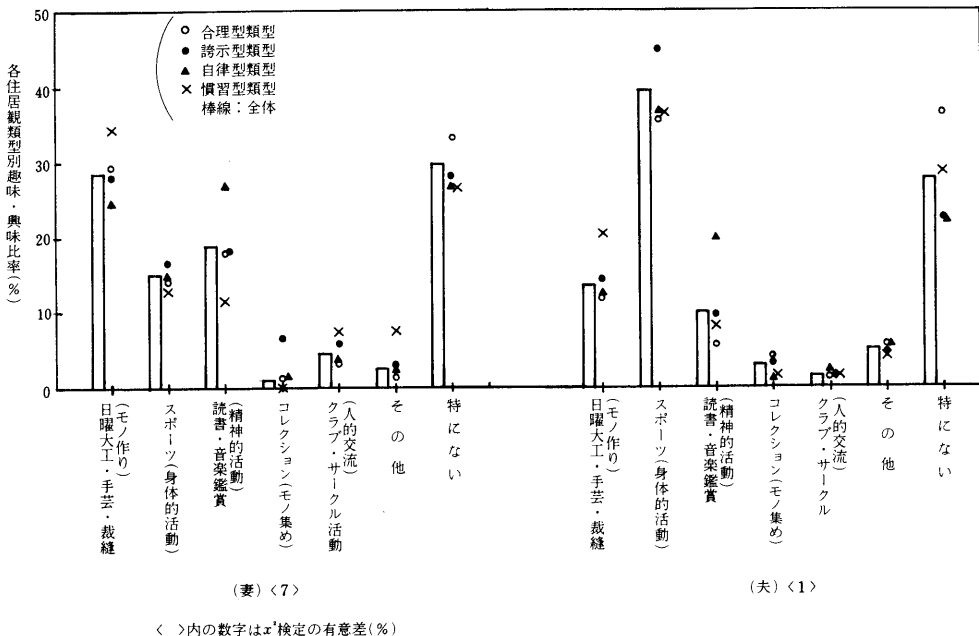


図13 妻・夫別住居観類型と趣味・興味の関連

最後に、居住者の個性の一側面として、趣味・興味と住居観パターンとの関連を図13に示す。趣味・興味を、「モノ作り」「身体的活動」「精神的活動」「モノ集め」「人的交流」「その他」「特にない」に分類して質問した。妻と夫の差異をみると、妻では「モノ作り」「精神的活動」が多く、夫では「身体的活動」の割合が妻より圧倒的に多い。住居観パターン別にみると、妻・夫ともに「慣習型類型」では「モノ作り」、「自律型類型」では「精神的活動」、「合理型類型」では趣味・興味を特にもたないものの割合が他パターンより多く、「誇示型類型」の妻では「モノ集め」、夫では「身体的活動」の割合が他パターンより多い( $\chi^2$ 検定は妻で10%、夫では1%水準で有意差あり)。

#### 4. 結 論

農業地、市街地（住宅地、商業地、工業地の各用途地域）に居住する小・中学生をもつ妻と夫 956 件を対象として、統計的に抽出した住居観パターンと家族の社会的階層、家族構成、生活観等との関連を検討し、以下の知見を得た。

- 1) 住居観パターンと家族の社会的階層条件との関連を検討した結果、「合理型類型」の妻・夫ともに世帯収入、本人の学歴、配偶者の学歴のいずれにおいても低い方に片寄り、夫の職業でも一般労働職が多い等、社会的階層が低いことがあきらかになった。一方、「自律型類型」では、妻・夫に共通して本人学歴、配偶者学歴とも高く、夫の職業でも専門職、管理職が多いなど社会的階層は高い。また、これらの傾向は、妻でより顕著に現われている。
- 2) 住居観パターンと家族構成との関連を検討した結果、「自律型類型」の妻と夫および「合理型類型」の妻では核家族の割合が多く、「慣習型類型」「誇示型類型」では拡大家族の割合が多いことがとらえられた。家族人数でも、妻では「自律型類型」「合理型類型」で少なく、「慣習型類型」で多い。この傾向も、妻の方がより顕著に現われている。
- 3) 住居観パターンと人生観、生活観、個性との関連を検討した結果、「合理型類型」では、夫は「生きがい」をもたない割合が多く、生活観には「私」重視志向が強い傾向がみられた。また、妻・夫ともに、趣味・興味をもたない割合が他パターンより多く、生活に対して独自の志向をもたない傾向で一貫している。

「誇示型類型」では、妻・夫ともに「生きがい」

を趣味・レジャーに求める割合が他パターンより多い。夫では、生活観は「現状保持型」の割合が多く、老後観も「息子と同居」志向が強い。また、趣味・興味では夫は「身体的活動」、妻は「モノ集め」の割合が多い傾向がみられた。この型では、生活に対する即時的享乐的志向が認められる。

「自律型類型」では、生活観については、妻・夫ともに「社会変革型」の割合が多く、社会への構えは〈変革〉志向を示し、さらに妻では「公」重視志向が他パターンより多い。老後観では、妻・夫ともに「別居」志向が強く、女性観では妻にのみ「仕事優先」志向が現われている。また、趣味・興味では、妻・夫ともに「精神的活動」の占める割合が多くなっている。この型では社会的関心や生活変革意識が強い点で一貫している。

「慣習型類型」では、夫の場合「生きがい」を仕事・勉強に求める割合が多く、生活観については、妻は〈保持〉志向および「公」重視志向が強く、夫では〈逃避〉志向が強い。老後観では、夫に「息子と同居」志向が強くみられ、女性観では妻に「家庭優先」志向が強い。趣味・興味では妻・夫ともに「モノ作り」が他パターンより多くなっている。この型では生活全般に「しきたり」志向が強く、この志向で一貫している。

- 4) 住居観パターンに影響を与える要因について、妻と夫の間における差異をみると、一般に、妻では家族の社会的階層条件や家族構成などの家族状況の実態の側面については、夫より住居観パターンによる差異が大きく、これらに影響を強く受ける傾向がとらえられる。一方夫では「生きがい」、老後観、趣味・興味など、人生観、生活観、個性などの意識系の側に、妻より住居観パターン間の差異が大きく、影響を受けやすいといえる。
- 5) 以上のように、住居観パターンと家族の社会的階層条件、家族構成、居住者のもつ人生観、生活観、個性などとの関連性をとらえ、さらにその諸特徴もあきらかにした。すなわち、住居観が上記の諸条件によって規定されて形成されることを検証したと考える。また、この影響度には、妻と夫で差異があることも明確になった。



(注)

- 1) 扇田信：「住居観の研究——住意識について——」、  
日本建築学会論文報告集68号、1961年6月
- 2) 服部崋生他：「住要求からみた独立住宅の類型化に  
関する研究」、住宅建築研究所No.4、1977年
- 3) 学歴の分類は、3分類とし、中卒レベルは中学校卒、  
尋常（高卒）小学校を含み、高卒レベルは高校・高  
専卒、旧制中学・女学校卒、大卒レベルは短大・大  
学・大学院卒、師範学校卒、旧制高校卒を含むもの  
としている。
- 4) 門脇厚司：「ニューライフ点描」、リサーチ出版、  
1977年